

利用する価値

1. モズのぐぜり

9月に入ると、秋晴れにキーンッキーンと鋭い声で鳴くモズの声が季節を告げます。この鳴き声を昔からモズの高鳴きとよびます。雄が繁殖期に入る前にナワバリを決めるためといわれています。猛禽と同じような嘴をしていて、昆虫や小動物を捕食します。見通しのよい開けた場所を好みますから、打吹山の展望台周辺や長谷寺の八十八ヶ所、倉吉市営陸上競技場でよく耳にします。



モズは鋭い声だけではなく、茂みの中から小声でルル...チョ...ピピ ギィクユと表現しにくいささやくような長い鳴き声もあります。このような鳴きを「ぐぜり」とよびます。メジロが囀っているようでもあり、いろいろな鳥の鳴き声が時々入ってきます。姿を見ないとモズだと思わないで他の鳥がいると感じます。漢字では、モズを百舌鳥と書きますが、いろいろな鳥の鳴き声を真似、寄ってきた小鳥を捕まえて食べるという思い込みからこの字を当てたようです。インコのように、鳥類は聞いた音声を自分の囀りに取り込み、それによって自分をアピールする習性がありますが、だれに聞かせているのでしょうか。

2. アケビの実

打吹山には小葉が5枚のアケビと3枚のミツバアケビおよびその雑種があります。つる性は他の植物に絡んで上にのぼり光を十分に確保するためですので、遊歩道脇で口を開けている実がよく目立ちます。果肉の糖度は相当高く、優秀な果実になる要素をもっていると思われませんが、観賞用に市販されています。食用としては山形県や岐阜県で果皮を利用しています。種子が多く、日持ちしない点の改良が望まれます。



この大きく甘い実を付けることはアケビにとってどのような意味があるのでしょうか。多量のエネルギーを消費しても、実を付けるのは、種子を散布してもらうためです。種子が熟さないうちは緑色で葉の中に隠れている実が、熟すと赤く変わり存在を誇示します。果肉と種子を一緒に食べ、種子を糞として離れた地点に落としてくれる動物が対象です。アリのように甘いところだけを持ち去るものはだめです。動物にとって魅力のある大きな実にしなければならなかった相手は、一口で食べてくれるクマやサルです。ヒヨドリなどの鳥は、選り分けて食べるので、よくない相手です。

打吹山での種子運搬者は、樹上でも地面でも食べてくれる雑食性のテンです。石の上などで見られる糞の中の黒いアケビの種子が物語っています。

(倉吉博物館専門委員 國本洗紀)